飛鳥寺　金銅　釈迦如来像（飛鳥大仏）　重要文化財

飛鳥寺について

日本に仏教が伝えられた後、蘇我氏が崇仏の立場をとり、仏教を積極的に受容したことはよく知られている。その蘇我氏の馬子が日本で初めて本格的な伽藍を営んだのが法興寺（飛鳥寺）である。法興寺は、『日本書紀』と『元興寺伽藍縁起并流記資財帳（以下、『元興寺縁起』)』所収「露盤銘」によれば、崇峻元年（588）に建立が始まり、推古 2 年（594）に造り終えたという。ところが、『日本書紀』、『元興寺縁起』所収「丈六光銘」によれば、さらに 605 年から 609 年にかけて鞍作鳥（止利仏師）によって金銅と刺繍の丈六仏が作られたとされる。以降、宮に隣接し、壮大な伽藍を誇った法興寺は、日本における仏教興隆の中心的存在となっていった。

皇極 4 年（645）の乙巳の変によって蘇我入鹿が暗殺され、蝦夷が自殺し、蘇我氏の嫡流は滅亡した。しかし、その結果、法興寺は蘇我氏の氏寺から国家の寺院へと変貌を遂げた。孝徳天皇が即位すると難波に遷都したが、斉明元年（655）には再び飛鳥に還都し、法興寺周辺には祭祀施設や外交施設が設置され、法興寺は飛鳥における中核寺院としての地位を保ったとみられる。和銅 3 年（710）の平城遷都にともない、法興寺は養老 2 年（718）に平城京の東の外京に移転して元興寺と称し、壮大な伽藍が営まれた。しかし、飛鳥の伽藍も残り、現在は安居院飛鳥寺がその法統を受け継いでいる。飛鳥寺には、丈六の金銅釈迦如来坐像が本尊として安置されている。この本尊像（以下、飛鳥大仏）については、609 年に完成した止利仏師作の金銅丈六仏にあたるとされるのが一般的である。ただし、飛鳥大仏は鎌倉時代の初め、建久 7 年（1196）に火災にあい、頭部と手を残して焼失したと伝えられる。

昭和 31 年（1956）から翌年にかけて行われた発掘調査の結果、飛鳥寺は塔を中心とする 1 塔 3 金堂形式の伽藍であったことが明らかになった。また、中金堂と塔の基壇がともに壇上積で、花崗岩の地覆石と凝灰岩の羽目石からなるのに対して、東西金堂は 2 重基壇で、下成基壇が周囲に玉石1 段を並べて檀上に礎石を据え、上成基壇は乱石積とする、やや格下の基壇であることが明らかになった。そして、現本堂は中金堂の位置にあたり、飛鳥大仏もその本尊が置かれるべき位置に安置されているという。この発掘の成果に照らして、先の史料や飛鳥大仏の伝来をいかに解釈するか、その後活発な議論が展開している。

飛鳥大仏の蛍光Ｘ線分析調査

近年、飛鳥大仏について蛍光Ｘ線による金属組成分析、3 次元計測、像内観察等の詳細な調査を実施したところ、頭部のうち肉髻[i]の大半、地髪部[ii]の正面下部から面部にかけて、右

手の掌上半から第 2〜4 指、第 1・5 指の付根にオリジナル部分が残り、頭部の側面から背面にかけてと体部の大半は火災後の再鋳造になるものと判断された。ただし、頭部のオリジナル部分と再鋳造の体部では青銅成分が似通っており、体部の鋳造には火災で溶解した青銅を再利用した可能性があるのに対して、右手は金属組成が異なり、もとより別製とみるべきことが明らかになった。また、肉髻も別鋳とみられ、本体の鋳造にあたっては頭頂部をいわゆるハバキ[iii]とした可能性があることも確かめられた。頭頂部を別鋳とするのは薬師寺金堂薬師如来像と同じである。飛鳥大仏の肉髻、地髪のオリジナル部分には当初からのものとみられる鋳造による巻き貝形の螺髪(らほつ)が多く残るが、これらは内部を中空とし、底部の 1 箇所に丸枘(まるほぞ)を作りだし、この丸枘を頭髪部に穿った孔(あな)にさし込み、かしめで止めている。実は、こうした螺髪の仕様も薬師寺金堂薬師如来と同様であるという。年代を超えて同じ技法が継承されているのは興味深い。

金銅仏については、丈六仏であっても失蠟法による鋳造が想定されてきたが、右手が別鋳だとすれば、土型（分割型）による鋳造の可能性を考えなければならないだろう。また、右手が別鋳であることは、次のような可能性をもしめしている。すなわち、毛利久が提案した、飛鳥大仏は 596 年に完成した中金堂本尊であり、609 年に止利仏師によって造立された銅丈六仏は東西金堂いずれかに安置されたという可能性である。この説によれば飛鳥寺には 2 体の銅丈六仏があったことになり、そのうち一体が止利仏師によるものであった。だとすれば、現飛鳥大仏の頭部は中金堂像のものでありながら、右手だけが 609 年に止利仏師によって造立された別の丈六像のものという仮説が理論上は成り立つ。実は、青銅の組成についても、右手のそれはいわゆる止利派の金銅仏に近いと言える[iv]。ただし、そもそも建久七年の火災時の記録からは飛鳥寺に銅の丈六仏が二体あったと読み取ることはできない。創建事情についてはなお諸分野からの総合的な検討が必要である。

飛鳥大仏のオリジナルの姿

ところで、現在、飛鳥大仏は竜山石(たつやまいし)[v]の基壇上に坐している。この基壇は当初からのものとみられ、大仏はその中央の高さ 20 ㎝ほどの盛り土上に坐している。大仏頭部のオリジナル部分は、小ぶりな肉髻、細面の顔立ち、杏仁(あんにん)形（アーモンド形）の目など、中国の六世紀前半あるいは朝鮮半島の六世紀頃の仏像様式にならっており、法興寺創建期にさかのぼるとみて間違いない。つまり、この頭部をそなえた仏像は、坐像であれば懸裳(けんも)[vi]を表していたはずで、現状の基壇上にさらに宣字座(せんのじざ)（須弥座(しゅみざ)）[vii]を設け、そのうえに坐していたと考えられる。ところが、基壇には中尊が坐す盛り土の左右に接して直径、深さ各 30 ㎝ほどの孔があり、もしこれが脇侍(きょうじ)像に関わるものだとすれば、坐像の飛鳥大仏がもとより中金堂の

本尊であったとの前提には疑問が生じる。というのも、大仏頭部はその大きさから丈六級の仏像のものであることが明らかで、宣字座があったとすればその下框の幅は現在の盛り土よりも広かったはずで、この孔が塞がれてしまうからである[viii]。この孔が脇侍に関わるものだとすれば、本来はあるいは韓国の慶州・皇龍寺金堂のように立像の仏三尊像であったと考えた方が自然ではないだろうか。

飛鳥大仏の面部については右こめかみ辺や鼻下の嵌金（はめがね）を除いてかなりの部分が当初とみられるが、そこに中国の南朝梁（りょう）の様式の影響が認められることも重要である。なお、飛鳥時代の仏像の耳は耳朶（じだ）が板状に表されるのが一般的ながら、飛鳥大仏の耳朶は孔をうがって環状とし、かつ貫通している点が注目される[ix]。環状貫通の耳は中国では隋唐以降に多くみられるようになるものの、それ以前にはほとんど見られない。ところが、四川省成都出土の南朝梁の如来像には例外的にみられるからである[x]。飛鳥大仏の耳については成分分析の結果が当初部と修補部との中間的な値であったため保存状態が明確ではないが、もし耳朶が当初の形を伝えているとすれば、それは梁の様式を反映していることになろう。いずれにしろ、日本最古の仏像がその原位置をほぼ変えることなく現在に伝わっていることはまさに奇蹟と言うほかない。

---

[i] 如来の頭頂部の盛上り。仏がそなえる三二の身体的特徴の一つ。

[ii] 如来像の肉髻（にくけい）や菩薩像の髻（もとどり）（髷）をのぞく頭髪部のこと。

[iii] 幅木、巾木、巾置と表記することもある。日本刀の身の根元につける刀身を支える金具「鎹・鈬」(いずれも「はばき」と読む)が語源と思われるが、鋳造用語としては、容器の口などの開口部に設ける中型と外型の連結部を意味する。金銅仏では像や台座の底部、あるいは像の背面に設けた開口部などの中型と外型の連結部を広くハバキという。

[iv] ただし、飛鳥大仏の右手は、止利仏師作の法隆寺金堂釈迦三尊の手とはかなり表現が異なり、形のうえからこれを止利仏師作とみるのは難しい。

[v] 兵庫県高砂市で産出する凝灰岩。

[vi] 坐像の仏像の台座の前面、あるいは前面から側面にかけて垂れる衣。なお、懸裳のある台座を裳懸座という。

[vii] 方形の上框・腰・下框から構成される台座。その形態が「宣」の字に近いことから「宣字座」と称する。ただし、史料にはしばしば「須弥座」と記されるように、本来は須弥山をかたどったものである。

[viii] 奈良文化財研究所作成の復元図があるが、法隆寺金堂釈迦三尊を参照しつつも、宣字座を極端に小さくし、脇侍の蓮華座の茎を外側に大きく屈曲させるなど、かなり無理がある。

[ix] 法隆寺夢殿の救世観音も耳朶に深く孔をうがつ。ただし、貫通はしていない。

[x] なお、朝鮮・三国時代の作例では、江原道横城出土の仏立像の耳朶が、貫通はしていないが環状である。